

Title	大阪市大における中世史研究の二〇年
Author	仁木, 宏
Citation	市大日本史. 21 巻, p.15-21.
Issue Date	2018-05
ISSN	1348-4508
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学日本史学会
Description	特集：共同の営為としての歴史学：市大日本史ここ一〇年の歩みから

Placed on: Osaka City University

大阪市大における中世史研究の二〇年

仁木 宏

一九九六年、園田学園女子大学から大阪市立大学文学部に着任した私は、市大での教育・研究期間が二〇年余となった。

そこで本稿では、この二〇年間の研究をふりかえり、中世史の全国的な研究潮流とのかかわりや、院生・学生教育との関係について紹介したい。

一 研究テーマをふりかえる

まずこの二〇年間、どのようなテーマで研究してきたのか、おおむね時系列で説明する。市大着任以前の研究についてもふれる。

(1) 京都研究

都市京都についての研究は、京都大学（大学院文学研究科）に提出した修士論文（一九八七年。以下、87とする）に始まり、博士後期課程における諸論文、日本史研究会大会報告89を経て、現在につづいている。

私自身は、中世史専攻であったが、朝尾直弘氏（近世史）の研究に大きな影響をうけ、この間、町共同体の実態を一六世紀にさかのぼって

追究した。都市共同体の形成・展開を都市社会の変容と関連づけて論じるとともに、室町幕府から三好・織田・豊臣と推移する政権のあり方と密接に連動するものとして解いた。これは、私自身特有の京都論であり、都市共同体像であった。集大成の著書は二〇一〇年に刊行した（付表の2010年の②欄。以下、10②とする）。

その後、京都研究を総合的に深化させることはできていないが、都市文書論を京都を舞台に展開したり（14③）、京都の空間復元研究（06③）、『洛中洛外図屏風』研究（16③）を試みたりはしてきた。また、平安京・京都研究集会（詳しくは後述）を主催するなかで、中世にかぎらず、京都に関するさまざまなテーマをあつかい、多彩な研究者と接することができた点は自分自身の「財産」になっている。

(2) 山城国乙訓・西岡の地域史研究

仲村研氏の死没にともない、『長岡京市史』本文編96の執筆を引き継いだことにはじまる。一九九四年、長岡京市内に移住したことも研究を進める契機となった。

この地域は、京都の近郊であるため、ふつう文献史料が途切れる（荘園史料と村有史料との間の断絶）一六世紀後半においても連続的に歴史像を追うことができる。また「惣国」と自称するトップレベルの地域共同体を形成し、その主導者層である国衆たちは三好氏、細川藤孝にかかわって、首都京都をめぐる政争でも重要な働きをした。

勝龍寺城、物集女城などの城郭についての歴史地理学的な研究を行い、考古学研究とも密接なつながりを維持するなど(05②)、まさに「郷土史」として地域史研究に従事できる貴重なフィールドとなっている。

(3) 寺内町研究

卒業論文85に始まり、大阪市立博物館（大阪歴史博物館）との共同研究、『寺内町の研究』（98②）編纂などを行い、また関西近世考古学研究会大会報告によって考古学研究者との共同研究（00③）に取り組みむきつけにもなった。

『天文日記』（本願寺宗主証如の日記）によって、大坂本願寺・寺内町の空間構造を復元したり（98③）、本願寺は寺内町においては都市領主であり、寺内町が民衆闘争の拠点であるとする通説的理解を塗り替えた（97③）。寺内町を特別な都市とみるのではなく、「普通」の都市の一つとして分析するなかで、その歴史的意義を説明しようとしている（03③）。

以上の（1）から（3）は、一九九六年以前からの継続的なテーマである。これに対して、市大就職後は以下のような新しいテーマに取り組んできた。

(4) 摂津・河内・和泉の地域研究、都市研究

中河内が私の出身地であり、卒業論文85で各地の寺内町をあつかったことにはじまる。和泉市史編纂へのかかわり、『堺の歴史』（99②）共同執筆なども研究の契機となった。

ここは、戦国時代から近世移行期にかけて地域社会の変動がもつとも激しく、多くの都市が族生した地域であり、また細川氏、畠山氏、三好氏などの権力基盤でもあった。富松（尼崎市、03③）、茨木（06③）、岸和田（08③）、池田、飯盛（15③）など、それぞれの個別の地域研究をもとに地域全体の社会変動をどのように解くか、考察を重ねてきた。乙訓・西岡地域とは異なる社会構造を示すのみならず、近年は、摂津・河内北部と南河内・和泉との相違点の意味合いなども検討している。

(5) (狭義の) 大坂研究

戦国時代から豊臣時代までの都市大坂研究である。もともと行っていた大坂寺内町研究にくわえ、市大日本史学会での大会報告（01③）から豊臣期大坂城・城下町研究に携わった。

大坂城（天坂城）については、岸本直文氏らと共同研究を行い、ボーリング調査などの新しい研究方法によって地中に埋もれた豊臣期の姿の

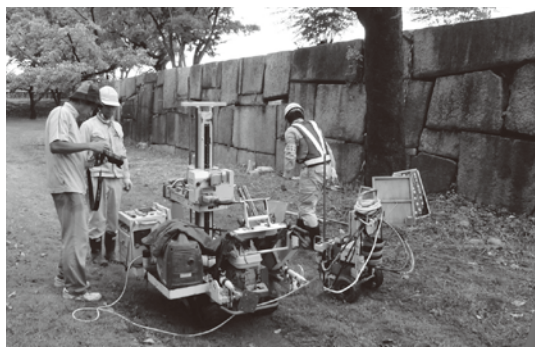


写真1 大坂城の調査

付表 中世史研究 20 年（1996～2016 年）

年度	①行事・学会・運動など	②著書・編書	③主要論文	④科研など
1996			「松井家文書三題」一元亀年間の山城西園と細川藤孝一	
1997	山科本願寺土塁保存運動 京都の埋蔵文化財を考えあう会（～1997年）	「空間・公共団体」（青木書店）	「細川藤孝と平嶋秀存」 「寺内町における寺院と都市民」 「都市京都と秀吉—都市の平和と公儀—」 「二条宴乗記」に見える大坂石山寺内町とその周辺」	
1998	紀ノ川流域荘園詳細分布調査（～2003年）	「寺内町の研究」全3巻、大澤研一と共編（法蔵館） 「松尾寺所蔵史料調査報告書」（和泉市史紀要第3集） 「戦国の寺・城・まち—山科本願寺と寺内町—」（事实上） 共編著（法蔵館）	「大坂石山寺内町の復元・再論」 「吉崎の歴史環境」	
1999	日本古文書学会大会	「堺の歴史」栄原永遠男らと共編（角川書店） 「鹿王院文書の研究」（思文閣出版） 「新修亀岡市史」資料編1	「戦国期京郊における地域社会と支配—西園勝龍寺城と「一職」支配をめぐる一—」 「戦国時代京都の惣町と町組をめぐると一考察」 「荘園解体期の京都」「都市文書と都市社会」	
2000	紀ノ川流域荘園詳細分布調査（～2003年）		「寺内町研究の成果と課題」	
2001			「豊臣国大坂城下町の歴史的位置」 「『御土居』への道—戦国・織豊期における都市の展開—」	科研「京郊中世村落の歴史的環境復元のための総合的研究」（～2002年）
2002	COEでハンブルクに数ヶ月滞在。その他にベトナム、イタリア、フランス諸都市めぐり 富松城跡（尼崎市）保存運動	「都市」—前近代都市論の射程—、編著（青木書店）	「近世社会の成立と城下町」	
2003	開田城・物集女城保存運動	「戦国時代、村と町のかたち」（山川出版社）	「寺内町と城下町—戦国時代の都市の発展—」 「戦国期摂津河内都市のオリジナリティ」 「戦国富松都市論」	
2004	守護所シンポ@岐阜		「ドイツ中世港湾都市の空間構造」 「近世都市の成立」 「摂津国渡辺津の位置をめぐると一考察」 「播磨国美養郡淡河市庭（神戸市北区）の築市制札をめぐると一考察」	
2005	中世都市研究会／京都会大	「京都乙訓・西園の戦国時代と物集女城」中井均と共編著（文理閣） 「難波宮から大坂へ」栄原永遠男と共編著、和泉書院	「港津と守護所をめぐると一考察」 「中世大坂都市論—都市群とネットワーク—」 「戦国時代摂津・河内の都市と交通」	科研・基盤B「港湾をともなう守護所・戦国城下町の総合的研究」（～2007年）
2006	岸和田古城保存運動 茨木城堀跡保存運動 大阪歴史学会事務局長（～2008年） 西村幸信氏を思ふ会	「守護所と戦国城下町」内堀信雄らと共編著（高志書院）	「守護所・城下町と府中・所口湊」 「室町・戦国時代の社会構造と守護所・城下町」 「戦国近江のなかの敏満寺—中世都市の空間と景観—」 「日本のなかの京都」 「戦国・信長時代の茨木の町と茨木氏」 「中世後期京都の都市空間復元の試み」 「前近代日本における都市空間と文化形成」 「岸和田古城の歴史的评价をめぐって」	
2007	平泉寺（勝山市）で聞き取り調査（～2008年） 四天王寺文書の調査（～2009年） 勝瑞城（徳島県藍住町）調査に着手			科研・萌芽「中世山岳都市を「中世都市」として分析するための基礎研究」（～2008年） 市大都市問題研究「都市問題の歴史的分析とその提示方法の研究」（～2009年）
2008		「信長の城下町」松尾信裕と共編著（高志書院） 「岸和田古城から城下町へ」大澤研一と共編著（和泉書院）	「信長の城下町」の歴史的位置」 「岸和田古城が残したも—研究成果と今後の課題—」 「美濃加納築市令の再検討」	科研・基盤B「日本中世における「山の寺」の基礎的研究」（～2011年）
2009	敏満寺（滋賀県多賀町）調査			科研・萌芽「慧構の理論的・実践的検討」（～2011年）
2010	博学連携（市大と大阪市博物館協会）調印	「京都の都市共同体と権力」（思文閣出版）	「近江国石寺「築市」の再検討」 「堺と中世都市」	
2011	中世サマーマナーセミナー幹事校（湖東） 夏合宿：東北大学にて被災資料レスキュー		「日本中世における「山の寺」研究の意義と方法」	市大・都市問題研究「大阪城学術総合調査のための基礎的研究」
2012	中世都市研究会／大阪大会 兵庫城石垣、聚楽第本丸南辺石垣保存運動	和泉市の歴史6（テーマ叙述編1）『和泉市の考古・古代・中世』栄原永遠男らと共編	「都市における「場」の特質—戦国大名法からみる—」 「中世の開田荘（村）と中小路氏」 「中世和泉の権力と地域社会」人びとの生活と社会の変貌」	科研・萌芽「文理融合による大阪城中心城の研究」（～2013年）
2013			「地方史研究の可能性—荘園・都市・城をめぐって—」 「高山石近と戦国時代の畿内社会」 「城下町—中世都市から天下統一の拠点へ—」 「戦国時代の城下町における「町づくり」」	科研・基盤A「中世・近世移行期における守護所・城下町の総合的研究」（～2017年） 市大重点研究「豊臣大坂城・城下町の総合的研究」（～2014年）
2014	守護所シンポ@清須 大歴大会「伏見城」	「近畿の名城を歩く」大阪・兵庫・和歌山編、福島克彦と共編著、吉川弘文館 「中世日本海の流通と港町」綿貫友子と共編著、清文堂	「根來寺の都市論と首都論をめぐって」 「一五一六世紀京都の都市構造と『都市文書』」 「宗教一揆」・「戦国時代大阪の城と町」 「中世港町における寺社・武家・町人」 「岐阜城下町の形成」	
2015	「石山」問題シンポ 村岡山城（福井県勝山市）調査	「近畿の名城を歩く」滋賀・京都・奈良編、福島克彦と共編著（吉川弘文館） 「秀吉と大坂—城と城下町—」大澤研一らと監修（和泉書院） 「飯盛山城と三好長慶」中井均らと共編著（戎光祥出版） 「東アジアの都市構造と集団性（伝統都市から近代都市へ）」井上徹らと共編、清文堂	「十六世紀大坂論」 「戦国時代の河内と三好長慶—城・都市・キリシタン—」	市大基盤研究「豊臣大坂城山形曲輪の石垣復元」
2016		「日本古代・中世都市論」編著（吉川弘文館） 「歴史家の案内する京都」山田邦和と共編著（文理閣） 「守護所・戦国城下町の構造と社会—阿波国勝瑞—」石井伸夫と共編著（思文閣出版） 「白山平泉寺よみがえる宗教都市」阿部頼と（事实上）共編著（吉川弘文館）	「図像（イメージ）の中の中世都市」 「洛中洛外図屏風」の上京」 「高山石近と戦国時代の畿内社会」 「権力論—都市から見る「大坂」—「石山合戦」史観の問題性—」 「守護町勝瑞と権力・地域構造—阿波モデルの構築—」 「村岡山合戦と勝山城下町の成立」、「中世都市としての白山平泉寺の魅力」・「石見銀山都市論」	市大基盤研究「豊臣大坂城本丸周辺の地下探索による復元研究」

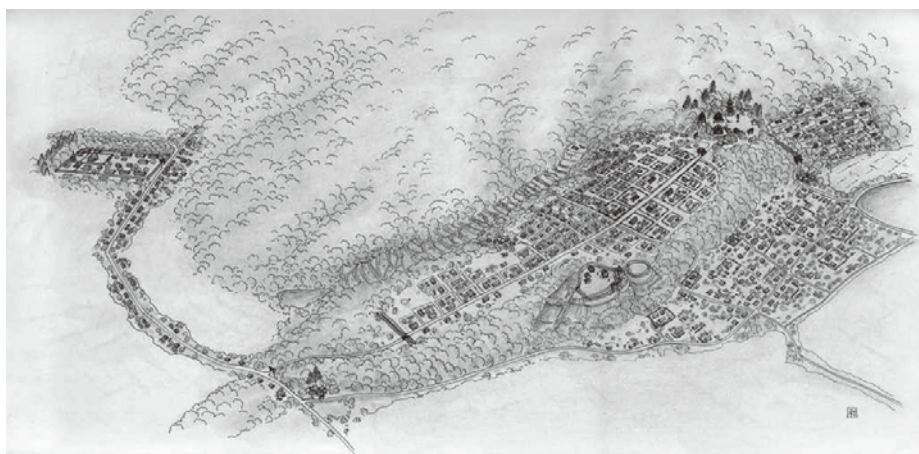


写真2 敏満寺の復元イラスト

解明を試みてきた(12④など)。こうした調査は、市大の地域貢献、大阪市博物館協会との博学連携事業への参画という側面ももち、またそうしたことから学内の競争的資金の獲得にもつながっている(16④など)。

大坂寺内町について

は、最近、「石山合戦」表現の歴史的問題点を指摘し(16③)、また「真田

丸」復元をめぐるNHK番組の「捏造未遂」について発言したこと

もある。豊臣大坂城下町の歴史的意義を総合的に解明し、日本史における一六世紀大坂の位置づけを新たな視角から行うための工夫を試みつつある(15③)。

(6) 「山の寺」研究

天台・真言系の巨大寺院を「山の寺」と呼び、固有の存在として研究してきた。いわゆ

る一山寺院であるが、日本中世都市の一類型をそこに認めるところに特色がある。

敏満寺(滋賀県多賀町、09①)、平泉寺(福井県勝山市、07①)などの見学・調査が契機となって取り組みはじめた。和泉市史編纂のなかで松尾寺をとりあげたことも刺激となっている。科研究費を取得し、全国的な調査、事例集成、シンポジウムの開催などを行った(07④)。

「山の寺」がもつ宗教、軍事、文化、技術などにもとづく中心性、人口の集中に着目し、地域社会や一国レベルにおけるその意義を解明している。また一向宗や戦国大名との相関関係から「山の寺」の意味づけを試みている(11③)。最近は、根来寺(和歌山県岩出市、14③)、金剛寺(河内長野市)などの個別研究も行った。

(7) 城下町研究

寺内町研究との対比で研究を始めた。守護所シンボ@岐阜(04①)での岐阜県・愛知県の研究者との出会いが大きな意味をもち、ついで勝瑞城調査にかかわって徳島県の研究者と親交をふかめた(07①)。科研究費を継続的に取得し、全国的な戦国期・近世初期城下町の研究を推進している(13④など)。

この時代の城下町に関する文献史料は必ずしも多くないため、歴史地理学や考古学からする空間復元研究をおこない、空間構造のあり方と権力の特質の相互関係を見きわめる手法を採用している。従来の類型論、発展段階論を批判し、城下町の前提として中世都市があり、港町や宗教都市の継承と否定を丁寧分析すべきことを明らかにした。また地域

による城下町構造の偏差の大きさにも注目している(13③など)。

一六世紀の都市の「最終形態」として城下町の意義を主張し、都市論なき戦国大名論・豊臣政権論の不十分さを指摘した。

(8) その他

最後に、少しだけあつかったテーマ、近年とりくみはじめたテーマについて紹介しておく。

COE事業でドイツ・ハンブルクに滞在した時、ドイツの中世都市を見て回った(02①)のをきっかけにドイツ都市に興味をもち、ついで大黒俊二氏の導きでイタリアの地方都市をまわる機会があった。従来は、日本中世都市はドイツ中世都市と近似しているといわれることが多かったが、それは主に社会構造からであった。ドイツにくらべてイタリアの方が空間構造がバラエティに富んでおり、私見ではそうした側面では、むしろ日本の中世都市はイタリアの都市に近いと感じている(04③)。その他、ベトナム・ハノイの前近代の都市構造の特色を絵図の分析から明らかにする研究も行った。

日本海側の中世港町の研究もおこなった(05④)。日本海沿岸では、大規模な河川の河口部に、強い風と波の影響で巨大な砂堆が生まれ、その内側のラグーンが発達した。中世にはこうしたラグーンを利用した港が各地で生まれ、そのうちのいくつかは近世にも継承された。なかには戦国期に城下町にとりこまれたものもあり、港町の発展と一六世紀の権力支配の浸透を一連のものとして検証できる例もある(14②)。

中世都市がどのように描かれるのか、興味をもって調べた。これま

では「洛中洛外図屏風」の研究は美術史が中心で、荘園絵図は歴史地理学、参詣曼荼羅は宗教史から分析されてきた。私は、これらの異なる媒体に描かれた都市像を統一して見る視角が必要と考え、道路をはさんだ両側に櫛比するイメージとして都市が描かれる点を重視すべきことを論じた(16③)。

最近とりあげたのはキリシタン研究である。キリシタン史研究者の多くが十分な史料批判なく宣教師史料をそのまま事実と認め、殉教や布教の拡大などを論じることを批判し、一六世紀の日本でキリシタン信仰がひろまった理由を社会構造からあとづけてみた。キリシタンと一向宗、法華宗などとの関係も意識している(14③)。

二 研究方法の特徴

ここでは、私自身の研究方法、あるいは研究の動機づけについて、特徴と考えるところを記してみたい。

もつとも特異なことは、遺跡の保存運動にかかわったことを起点にはじまったテーマがたいへん多いことであろう。山科本願寺土塁の保存運動(97①)、同じく富松城土塁(02①)、開田城(長岡京市、03①)、岸和田古城(06①)、聚楽第(12①)、根来寺などである。日本史研究会の総務委員(文化財担当)をしていた当時、「保存運動のための保存運動」ではない活動を心がけるようアドバイスをもらい、「運動」がより広範な歴史的考察、研究の進展に結びつくように努力してきたつもりである。市民向けの連続講演会にはじまり、遺跡そのもの

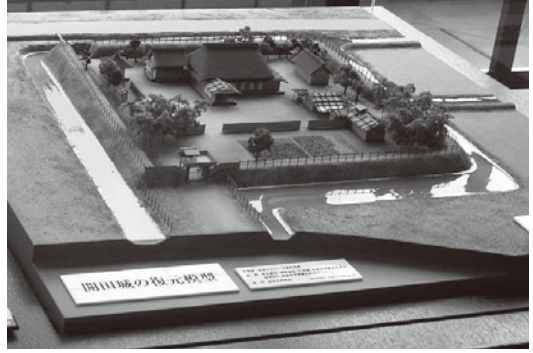


写真3 開田城の復元模型

は保存できなくても、図書の刊行などに結びつけてきた。

こうした過程で、実に多くの自治体の文化財関係職員と連携することができた。地元の乙訓・西岡についていえば、自治体史編纂から、科研費も使った研究会の開催(01④)、『京都新聞』地域版への記事連載などを行った。開田城跡の保存運動では、土塁の一部保存、マンションのエントランスに

城館模型を展示するにいたった(03①)。市大の学生向けの授業で現地見学させていただいたり、学生が市民団体主催講演会の「講師」をつとめたりすることもあり、教育の面にまでその効果はおよんだ。

自治体に勤める研究者との共同作業としては、平安京・京都研究会、一六一七(いちろく・いちなな)会もほぼ二〇年間にわたる活動履歴を有する。前者は京都を対象に、古代から近代までのテーマを設定し、文献史、考古学、歴史地理学、建築史などの学際的な研究集会を開催するものである。後者は、一六世紀以前、一七世紀以後の都市(的な)空間を対象に、同様に学際的な集会を催すもので、関西を中心しつつも関東や四国・九州でも開催した。数名の世話人の方々を中心に、催しごとに異なる地元研究者を結集し、地域を越えた研究方法の



写真4 物集女城での学生講演

紹介、共有をめざしている。

こうした活動の延長上に、科研費にもなう研究活動がある。この間、北陸の港町、「山の寺」、城下町を主題とする科研費を取得したが、いずれも全国各地で研究会を開催し、そこに他地域の研究者に集まってもらうことで、人的交流の活性化、研究内容の深化・流通などを試みてきた。こうした研究活動に出自がある図書も

何冊か刊行してきた(06②16②など)。あわせて中世都市研究の進展に

一定の寄与をなしたものと自分では考えている。

こうした科研や研究会に院生を参加させ、手伝ってもらった。その中で研究の方法論を学んだり、人脈を築くことも支援してきた。こうした活動が、彼ら彼女らの専門職への就職に結びついた面もあると考えている。中世史専攻の院生たちとの共同活動としては、『史学雑誌』「回顧と展望」98の執筆、大阪歴史学会事務局の分担(06①)、中世史サマーセミナーの主催(11①)、東日本大震災で被災した史料のレスキュー(於東北大学、11①)、敏満寺(09①)・平泉寺(15①)などにおける現地調査などを実施してきた。こうした場で若手研究者を教育、育成するとともに、様々な意味で私自身が彼らから学ばせ

二〇年前の日本中世史学界、とりわけ都市史研究や戦国時代史研究においては、石井進氏や網野善彦氏、脇田晴子氏。また藤木久志氏、池上裕子氏や久留島典子氏らの研究が主導的役割をはたしていた。それぞれ研究手法やスタンスのちがいは大きかったが、社会の全体を基礎構造から解くという姿勢に共通点があった。ところが、その後、荘園史や村落史の一部を除いてはやらなくなる一方、戦国期研究は、武家の合従連衡のみを解く狭義の権力論、さらには「皮相な」軍事史、政変史が中心になってしまった。都市史も、文献史研究者は関心を示

てもらったことも多い。最後に、より本質的な研究内容の特徴と考えていることについて述べておきたい。



写真5 東北大学でのレスキュー



写真6 敏満寺での調査

さなくなり、主に考古学の独壇場となりつつある。そのため都市の発生・展開を地域社会の構造と結びつけたり、権力の発展と連動させて考察することはほとんどなされなくなっている。

そうした中で私の研究は、内容が当たっているかどうかはともかく、中世都市を社会の全体構造のなかで位置づけることを一貫して試みてきた。その点に稀有性があり、一定の研究史上の意義もあるのではないかと自負しているところである。

三 反省と今後の課題

現在まで編著、あるいは、さまざまな研究者と協力して共編著の図書は一定数、刊行してきた。しかし、自分の研究成果をふりかえってまとめた研究書は一冊しか刊行できていない(10②)。自らの研究上の位置を再確認し、今後の道筋をさぐるためにも、こうした作業は必須である。心して追求したい。また、個別論文の集積ではなく、日本中世都市の全体像を包括的に論じる研究書の執筆にもつとめなければならぬ。こうした図書も97②以来、出せていない。

私自身、市大の退職(最終年度は2027年度)まで一〇年を切った。「折り返し地点」はすでに通り過ぎており、研究面での自己総括とともに、教育・指導においても若手研究者の育成におお尽力したいと考えている。二〇一九年三月末までつづく、文学研究科の仕事をはたしたあとは、もう一度、研究中心の生活に復帰したいと考えている。

(文学研究科)